110 誌上発表

橋田邦彦の音楽論

佐々木（勝井）恵子
東京大学医学教育国際協力研究センター／北里大学東洋医学総合研究所

橋田邦彦の著書『空月集』（1936年）のなかに，「(1) 自然の声（2）音楽の自然（3）音楽の道（4）道としての音楽（5）芸術の世界（6）ピアノのねいろ（7）声の共鳴（8）母音の話」といった8つのテーマからなる「音楽雑話」というものが採録されている．これらの話は，発声法研究会での橋田の講話を，日本医史学会理事長も務めた生理学者・内山孝一が「内山逝水」という名で「何らかの参考になることを信じ」て載せたものであるというが，瞥見すると橋田の科学論が主題となる『空月集』のなかでは異彩を放つトピックである．しかし，医学・医術・医道の三要素から成り立つという橋田の「医」の思想をより深く理解するために，橋田の音楽論をも研究上の視圏に含めることは，下記に挙げる3つの観点で重要な作業となる．

1)「人生としての自然の楽」

まず，「音楽」とは何か．橋田によれば，それは「言葉に代わって何かを表徴しようとするもの」であり，「自然の声」であるという．彼にとって「声」とは「人の働きを音にしたもの」であり，この点から，人生の表現としての音楽は思想と分かつことができないと述べている．また，人生は天地萬物とひとつであるという点から，「音楽は自然としての人生の創造」であり，「音楽は人生としての自然の楽でなければならない」という考えを提示している．さらに，論語から「人而不仁如禮何，人而不仁如樂何」と「興於詩立於濃成於樂」いう言葉を引用し，人生即自然の立場において，つまり「行」をつうじて初めて楽というものが「楽」に成り上がるのだと橋田は主張している．

この点は橋田の，「自然科学としての「医学」」と，「医」の実践，すなわち「医行」（「医」を行ずること）の概念の関係性を分析するうえで示唆に富む．

2)「音楽の道」

「音楽」というものを理解するには，科学と同様，「我々が生きてゐる所以」，つまり橋田のいう「道」が把握されなければならないという．その際，出来上がったものを「音楽」というのではなく，音楽が「音楽」として認められるその根本の所以を知らなければ，「音楽の道」というものはわからないという．つまり，「音楽があるが故に道があるのではなく，道それ自身が音楽に持ち来されるという立場まで来なければ，音楽の道が道として実現するとは云へない」と橋田は論述する．「音楽に没頭する者には，萬物音楽ならざるなしと云ふ境地が現はれる．そのときの萬物の動きは音楽の道である」という橋田は，「道」に合体することによってのみ科学が「科学」になるのと同様に，「道」に合体することによって楽も「楽」となり，道が音楽となって現れてくるという．

この点は，橋田の「医学」と「医道」（「医」の実現のために「人」の道を歩むこと）の両方の概念がいかに結びつき，「医」として現成するのかという点を考えるにあたり，興味深い．

3）芸術家と自然科学者

橋田の論に従えば，自己が世界と一体となり，世界の中に自己を没入することによって芸術が生まれるのと同様，自然科学者も自然と一体となり世界のなかに自己を没入することによって自然科学を創造することができるという．そして，「概念の世界に住むかに見える自然科学者と，具体の世界に住む芸術家とが，互に提携して人生を本当に見，人生を本当に生かすことができる」と橋田は強調する．

この点は，「医」を実践する者としての「医人」がどのような存在であるのかを解き明かす重要な手掛かりとなりうるだろう．

【引用・参考文献】 橋田邦彦（著）山極一三（編），『空月集』，岩波書店，1936年